

日本 戦闘者の



荒谷 卓（あらや たかし）
生年月日：昭和34年秋田県出身
略歴：昭和53年東京理科大学、陸上自衛隊に入隊、第19普通科連隊、調査学校、第1空挺団、第39普通科連隊、陸上幕僚監部防衛部、防衛局防衛政策課戦略研究室等に勤務。平成16年特殊作戦群初代群長に就任。平成20年依願退職（1等陸佐）。海外留学：ドイツ連邦軍指揮大学及び米国特殊作戦学校。
平成21年9月～30年10月、明治神宮武道場至誠館館長。
平成30年11月三重県熊野市に「国際共生創成協会 熊野飛鳥むすびの里」設立、代表を務める
著書：『戦う者たちへ』『サムライ精神を復活せよ』『特殊部隊vs. 鋭部隊—最強を目指せ』並木書房／『自分を強くする動かない力』三笠書房
熊野飛鳥むすびの里のHPアドレス
<https://musubinosato.jp/>

068

国際共生創成協会 熊野飛鳥むすびの里
代表：荒谷 卓



自衛隊を退官した俺は、長年構想を練っていた「百姓侍村」の創設を考えていた。「百姓侍村」とは、その名の通り、サムライつまり日本の戦闘者たちによって運営される百姓の村だ。俺たち日本人の祖先が、長い歴史の中で汗水たらして作ってくれた日本の国土と文化。祖先の思いを引き継いで、さらに豊かな日本をつくり上げるために日々全身全霊を尽くす。そこに家族愛、郷土愛そして国を愛する気持ちが醸成される。その大切なものを物理的あるいは思想的に破壊する者らを滅殺する。それが日本を守りぬく日本の戦闘者の使命だ。靖国の英霊たちが生をとして戦い守ろうとしたのは、家であり郷であり天皇陛下と国民で作上げてきた日本だ。主権とか、領土とか、国民なんて言う外国人が発明したような薄っぺらいものではない。今の日本は、その一番大事なところがすっぽりと抜け落ちてしまっていて、日本人でありながら日本のことを何も知らない。そんないかさま日本人が、本当の日本を守るはずもない。

本当の国防に従事するためには、われわれ日本人の祖先がそうしてきたように、日本の国土に根差し、その土地の自然とそこに生きる人々と生を共にし、歴史を共有し、共に将来を築く。そのような生き方をしようと考えていた。

そこで、周りの同志に声をかけてみたところ、それなりの者たちが賛同してくれた。ところが、いくつか問題があった。その第一は、ピンと気に入る土地が見つ

からないことだった。10年近くかけて田舎の秋田、関東一円や北陸、信州、東海まで足を伸ばして捜し歩いたが、予想以上に日本の国土の非日本化が進んでいた。いわゆる伝統的「在所共同体」と言われる日本の村落が見つからなかったのだ。例えば、俺の田舎秋田県大館市。荒谷家が先祖代々住んでいた大葛金山という部落は完全に解体して存在していない。それどころか在所共同体をつくる基盤すらない。もちろん、俺一人でそこで山林を開拓し生存自活することはできる。しかし、それは日本の再生とはまったく関係のない、今どきの個人主義的スローライフになってしまう。定年後の田舎暮らしのような、自分の人生だけを楽しむことなどしたくない。あくまでも、伝統的日本の集落をつくり、日本の再生の基盤とすることが目的だ。その村を運営すること自体が日本の防衛でなくてはならない。

第2の問題は、俺と共に村を作ろうというやつは皆戦闘者ばかりだった。それはそれで頼もしいし、戦闘やサバイブしていくのは最高の百姓侍村なのだが、伝統的日本の共同体創りには適さない。周りの人達から完全独立した戦闘者の村になってしまっただけではまずい。これでは日本再生の基盤足り得ないということに気づいた。

そうしているときに、明治神宮武道場至誠館2代目館長の稲葉稔から館長を引き継がないかという話が来た。最初は断った。というのも、俺は戦闘者ではあるが、戦闘をしない現代的武道家ではない。



「感性の開発」。目・耳・鼻・皮膚さらに靈感感覚を開放し、心と体全てで自然（周囲の環境）を素直に感じる。



「戦いの理の例」。体による先手で相手の攻撃を引き出す。

俺は、戦闘者に対し戦闘精神と戦闘技能を教育訓練することはできるが、一般人とくに女子供に武道の技を教えるような能力はなかった。しかし、よくよく考えると、明治神宮に奉職するということは明治天皇に仕えることになる。これは、日本の戦闘者としては誉であり、天皇陛下に忠を尽くす日本の戦闘者としての正しい在り方であった。また、武道を通じて戦闘者以外の人々とのつながりもできるであろう。いろいろ考えた結果、俺は明治神宮至誠館館長の職を受けることにした。

平成20年、明治神宮に奉職し、翌21年10月、正式に明治神宮武道場至誠館館長となる。明治神宮武道場至誠館は、明治神宮御祭神明治天皇の大御心に副い奉る国民の精神養成を目的としており、また武道場創設にかかわった葦津珍彦先生の影響もあり、武術だけではなく「武学」を教育することを特徴としている。その武学担当師範であったのが、俺を自衛隊へと導いてくれた島田和繁先生であった。島田先生とのご縁で、20歳から至誠館に通いだした俺にとって「武学」は、俺の生き方を考えるうえでとても大事なものであった。至誠館には、「武学」の他に実技科として「弓道科」「柔道科」「剣道科」「武道研修科」がある。また、全日本弓道連盟の本部道場も兼ねる弓道施設を有しており、弓道においては名実ともに日本を代表する道場である。

至誠館館長となった俺は、「武学」を担当し、また、「武道研修科」で剣術と体術等を教えることにした。「武道研修科」というのは、合気道と鹿島神流を指導する科だ。武道研修科の門人は、初代館長田中茂穂が至誠館館長就任以前から指導していた東京大学、中央大学、専修大学等の合気道部の学生及びOB・OGが大多数を占めており、一般社会人の門人は少なかった。俺が館長就任後、一般社会人の門人数は増えたが、自衛官門人はほとんどいない。

そこで俺が館長としてできることの一つとして、至誠館において日本の戦闘者を育てることにした。明治神宮の御祭神明治天皇は、西郷南洲翁や山岡鉄舟などと言った無類の日本の戦闘者がお世話をした天皇で武人の気質を有していた。また、日本陸海軍軍人に対し軍人勅諭を頒布して「朕はお前たち軍人の総大将である。だから、朕はお前たちを手足のように信頼する臣下と頼み、お前たちは朕を頭首と仰ぎ、その親しみは特に深くなることであろう。朕が、国家を保護して、

天照大神の恵みに応じ、代々の天皇の恩に報いることが出来るのも出来ないのも、お前たち軍人がその職務を尽くすか尽くさないかにかかっている。我が国の威光が振るわれないことがあれば、お前たちはよく朕とその憂いを共にしなさい。我が国の武勇が盛んになり、その誉れが輝けば、朕はお前たちとその名譽を共にするだろう。お前たちは皆その職務を守り、朕と一心になって、力を国家の保護に尽くせば、我が国の人民は永く平和の幸福を受け、我が国の優れた威光は大いに世界の輝きともなるだろう」とまでおっしゃった天皇だ。その明治天皇を祀る明治神宮の武道場に自衛官が集い、日本の戦闘者としての心身を鍛錬することは、さぞかし御祭神がお喜びになることだろう。とはいっても、至誠館の指導者も門人もみな一般人で自衛官の体力をフルに発揮した戦闘者の育成できる環境ではなかった。そこで、俺の舎弟の本物の戦闘者である稲川義孝を指導員に入れ、自衛官の稽古時間「自衛官クラス」を新設した。「武学」で日本精神を学び「自衛官稽古」で身体を鍛える。これは自衛隊の中でもできていない本物の日本の戦闘者を育成するための場となった。

そのうち、参加していた自衛官からの要望で、自衛官としての能力向上に直接つながるように、道場ではなく実際の山林地形を利用した場所での稽古を開始することとなった。これが、現在も続いている自衛官合宿の始まりである。奥多摩の山中、使えるのは自分の心と体だけの対抗方式による終日の戦い。任務を達成するためにチームワークと戦術と技能・体力・知力そして精神をフル稼働させて行動する。サバゲーでやっているペイント弾やBB弾が、タックルであり蹴りであり鉄拳だ。行動エリアは数十キロに及ぶ。しかもゲームではなく、

真剣による稽古。



真剣による稽古。



自衛官稽古恒例の「全員に勝つまで終わらない相撲」の1シーン。右が筆者。

069